



歴史を織る上布

—幻想では無い、現実にある布—

正谷 博

聞き手・宮下咲 田村優香 (石川県立鹿西高等学校1年)

その人生

私は^{まさに}正谷博。昭和18年の8月29日生まれ。今は女房とふたり暮らし。父とね、子供の中で大きい子が織りをやっていたんですよ。私が仕事を始めたのは昭和38年。上布の仕事は家業やね、家の商売を継いでん。おばあちゃんやお母さんと一緒に仕事しました。父と母はほとんど家の工場におったんです。

私は基本、織ったりはしませんね。指導だけ。全工程は若い時からやってますから全て今でもできますよ。たまに頼まれてやったり、出かけてやったりしてますね。この仕事をやってよかった事？ 無いですね。ただ、好きな人にとってはね、良く思われてますけどね。大変だった事は別に無かったですね。仕事が複雑で難しいんですけどね、慣ればこういう物だと思ってやってますよ。

上布会館での仕事はね、平成3年から始まったんです。最初は私の名で工場をずっとやってたんですけど平成8年に

上布会館が建ったんで移動したんです。工場の時は、多くて10人くらいやね。若い頃は他の仕事はしてないですね。今もやらんけど、そういう暇が無かったんです。父のやってた工場は鹿西で一番大きかったんですけど、父が戦争にいったんで、石川県のある商事の社長とこに工場を売ったんですよ。

上布の歴史の潮流

一番歴史が変わったのは朝鮮戦争やね。物が無かった時代ですから、何を織っても売れたんですよ。その時は家の畳を起こして、織機を置いてたんです。今は着物売っとしても、月に5万円か8万円ぐらいだから生活できんですよ。伝統織物は、苦勞しとるんですね。たくさんの織物作っても、あんまり給料払えないですから、時間かかるけど払う事ができません。若い人がくれば教えてあげられますけど、自立して生活するようになったら機織りだけやっとしても生活出来ないからねえ、やめて年寄りだけになる。もちろん、興味が無かつ

たらできんさかいね。希望者おれば3年ほど修行させて上布会館の会員にする感じですね。だけどお金はあたらんですからよっぽど楽な人でないと。ほとんど年金あたるようになってから習いに来てる。でも一人前になるには2、3年じゃあ駄目ですね、10年かかっても駄目です。上布会館の最高齢の人はね、88歳だね。でもまだ一人前じゃあ無いって言ってます。皆15歳くらいからやとるんです。どこの産地もそうです。私たちは毎年伝統織物の産地に研修に行くんですけども、100歳ぐらいの人や90歳ぐらいの人がたくさんいます。それでも一人前って言いません。

日本で有名なのは八重山上布と、能登上布と、越後上布です。越後上布は世界遺産ですから、1反800万円ぐらいしますよ。経糸1年横糸1年で合計2年かかる仕事ですから、糸は作ってませんでしたね。黙々と茎裂いて、糸をつないでく。そんな仕事する者いないんですよ。だけど、機械を使ったり、能率の上がるのを使ったりするとレットルが与えられるんですよ。能登上布は糸を買って織ってますから、糸は作ってません。

糸の今昔物語

糸を買ってるメーカーさんは「日本繊維」です。糸はここじゃあ無いと駄目とか、そういう事は無いです。昭和以前は芋麻(ちよま)を刈って皮むいて自分で糸作ってたんですよ。芋麻は日本中どこでも生えてます。山の入り口、里山、道路の際にある。勢力や繁殖力が強くてね、どんだけ絶やそうと思っても絶えんのですよ。根を掘って焼いてしまわんと増える一方です。色は黄色か緑。芋麻は麻って書きますけど、本当は大麻じゃあなくてイラクサ科の植物なんです。芋麻は柔らかいんですけど、麻糸や大麻はものすごい硬い。だから芋麻だけ使ってる。4月に芽が出て1m20から30cmまで育って7月に必ず刈ってね、そんで爪で裂いて取るんですよ。特別な道具とかは使わない。皮むく時はね、一番外側の茶色くて汚い皮を削り取ってつなぐんですよ。つなぎ方はね、2cmほどつまんでひねってだけ。

上布会館の人は全員、反物になるような細い糸はできません。太いのしか出来ないんですよ。細いやつはよっぽど熟練せんとね。現在は技術者がいなくなって作っても慣れんっていうか下手っていうか、それで糸が汚くなってるんです。採ってくれば材料費はただになりますけど、手間がかかるんです。糸を自分でやるって大変ですよ。

糸の値段はね、1kg1万円。値段は変わって無いですね。全国的に使う人が少ないですからね。私たちは前の年に購入して、糸屋さんが集計して、次の年、何日機械を動かすか決めてやとるんですね。あと大正の末期、昭和3年くらいに能登部駅の前に糸の代理店のメーカーさんが2軒ほどあつ

たんですよ。そこは戦前に無くなりました。戦争が始まった時、繊維とかは禁止されて作られなくなって、それから糸屋さんがなくなつたんですね。小説とかドラマ見ると分かると思うんですけど、小学生とか高校生とかでも皆麻を着てた。絹は昔からお姫さんとか、身分の高い人が着る物だったんですよ。どんな人でも、正装は麻だったんです。だから、麻とかが重要だったんですね。今では需要は無いですね。

布作りの街

鹿西で上布を作るようになったのは元禄時代(1600年頃)と言われてるんです。かすり模様が入ったのは、1800年になってから。農家の人は外が明るい間は麻育てて刈って、冬に織りを皆です。作った物を近江職人が買って。糸を作ってもね、美味しい所は全部商人に取られるんですよ。だから、作るようになってからは勉強したり、近江の上布の方が日本で有名やったんで近江の職人を5、6人連れてきて習ったんです。今は上布が売れんようになって、皆やめたわけですよ。織ってる人は女性が多いですね。昔から女の仕事だったんです。男性の着物はおめでたい時に着る甚平しかありませんし、力仕事とかもありませんからね。

能登上布は大正から昭和まで日本一の生産だったけど、戦争が始まった時、軍の命令で全面ストップしたんですよ。で、戦争が終わってしばらくした頃にまた皆で作らんかって、戦前作ってた人達が作り出したわけですよ。残念ながら昭和20年代には着物の時代は終わってて、全員洋服を着るようになったんですよ。戦争前までは8割以上が麻の着物を着てたのが、戦後になったらゼロですよ。だから、復活したんけどすぐには売れなかつたっていう。ほんで昭和56年頃、中能登の上布工場の人全員集めて上布屋の組合こさえてやめるようになったんです。

復活したのは平成3年。国が伝統を復活させたらどうや、って言い出したんです。もちろんお金も出た。平成3年



上布会館で働く女性



(左上) らっせん (左下) 染める色を作っている様子
(右上) 上布会館 (右下) 上布で織られた着物

までの間は普通の織物です。普通の織物と能登上布の織り方は全然違いますね。能登上布は300年前からずっと同じ織り方です。織るのに必要な道具は糸と「ひ」っていうシャトル、それだけや。普通の織物を織る時は自動で1分間に水とか何千回もバァーッってエアで飛ばすからね、糸を通す「ひ」が全く無いんですよ。新潟はモーターとかでやってます。能登上布ではできません。手作り。現在の技術を取り入れたら伝統工芸じゃあなくなるから。まあ最終的な目標はね、伝統を残すって事なんで、皆織りには詳しいですけど、体系を重視してるんです。

熟練の喜び

織物はね、やっぱり準備が大事ですよ。準備してあれば誰でも織れますよ。織ってる時に一番大事なのは、糸が切れた時上下上下ってなってるのを確実に合わせてつなげばそれで元通りになるんですけど、怠ってそのまま踏むとからまって、また切れる。体験に来た人とかにはそういう人はいますけど、普通は2mくらい織っても1本も切れんのが普通です。他に大事なのは、工程をただ熟練する事。1日に5cmくらいしか織れんでも、辛抱して織る事やね。それができん人はすぐに辞めなあかん。自分で織ったり染めたりするのが、作る方の喜びって言うかね、それで作ってるんでしょ

うね。

濃紺の染め

能登上布を染める時は、かすりっていう模様を経糸につけて織るんです。能登上布はかすりばかりですね。絵のついたものもあるんですけどね、それは加賀友禅と京友禅の作家さんが全部描いてくれるんですよ。染織する時に、川で流したりするのとかありますけど、上布会館はやってませんね。洗い場みたいなのがあって、普通の水道水で洗うんですよ。能登上布を染める時は「らっせん」（染める種類の型の事）と「くし」っていう、へらみたいな物を使ってかすりの太さによって染めてるんです。1mm 間隔の細い間隔をくして擦るんですよ。染める色は年中一緒ですよ。かすりは「濃紺」っていう紺に黒混ぜて、ほとんど黒に近い色にして染めとるわけですよ。特殊な染料に茶色とかありますけど、名刺入れとか小銭入れとか作る時だけに使ってますよ。

染める時は2反ずつやるんですよ。1週間くらいで染まるかな。1回すれば毎日する必要が無いですから、準備とかはやってますけど、染める事はめったに無いんですよ。麻は硬くてそんなに浸透性が無い物ですから、絹や木綿のように簡単に染まらないですよ。麻に草木染めとかやると、色つけてもすぐ剥げるんです。ただ「藍」はね、麻にわりと合うんで

すけど、年々剥げてきますよ。でも特殊な物で、濃くてもいいし、薄なったら薄なついでいいと言われてますね。あと季節は関係無い。昔は梅雨時になると染め物がついたりしてやりにくかったんですよ。

職人達の館

上布会館の人たちはボランティアで集まっている。だから、自分の自由な時間に来て、ほんで自由に織って自分の家に帰る。そんなやりかたですね。でも9時30分から始めて、16時に帰るって決めてるんですよ。織る台は会員用に20台。体験用に4台。働いてる人はねえ、15人かな。ほとんどが60代以上ですねえ。上布会館は伝統を織るのを継承するとか、絶やさんために作ったんです。

職人さんは一年中研究してるみたいなので、商品作ってるって感覚はあんまり無いです。ただ、作った物は誰かに買って貰わんと駄目。お金入ってこんですから。でも、1ヶ月の間にあんまり来んねえ。多かった時はね、1日に団体さんで5人とかの時もありますし、ツアーのバスがね、1ヶ月に何十台も必ず入って来たんですよ。今じゃあ能登の地震でゼロですよ。体験はねえ、東京の人とか見にくるけど1日に平均して2人きますね。観光客は大体1年間に3000人くらいは来ますよ。

未来への財産

上布会館が建った当時(平成8年)の人数は13人くらいでした。少なかった時は文化財に指定された時(昭和35年)の11人。だけど個人指定だとその人が亡くなる場合がある。そういう時は「団体指定」にして団体として指定するんです。だから誰か死んでも、また新たに指定する必要は無い。鹿西は昭和35年に指定されたんですけど、その再来年くらいに指定受けた職人が1人もいなくなったんですよ。で、指定の仕方を改めて団体指定するようになったんです。今羽咋市には山崎さんて上布で作った小物を売ってる人の家があるんですけど、山崎さんと上布会館の人を合併して能登上布文化の保存会ってのを作ってくれて県が頼んだんですよ。で、会長は私、副会長は山崎さんなんですけども、保存会をまとめて文化財に指定したんです。団体で指定するために作った会なんですよ。

能登上布は終わらない

能登上布ってほとんど幻みたいにされてたんですよ。呉服屋さんでも、無くなったって思ってる人が多かったですね。でも今はインターネットとかで分かるようになったんで、ま

だやっとなつたかって見に来て買いに来たりしますよ。能登上布の知名度はまだまだですね。ただ、雑誌とかテレビにはしょっちゅう出てますから段々上がってると思います。能登上布はこれからいつまでも永久に続いて欲しいですね。

[取材日 2013年8月6日・8月20日]

PROFILE

正谷 博 まさたに ひろし

昭和11年8月29日生・77歳
能登上布保存会会長・能登上布振興協議会会長

昭和31年から57年間この仕事一筋で働く。また上布製作の全工程の技術の研修と指導にあたる。年に1度公開講座を実施している。家族が上布などの織りの仕事に就いており、本人も家族にならって織りの職に就いた。



● 取材を終えての感想 ●

「聞き書き」は思っていた以上に大変でした。インタビューする時も用意した質問だけではなく、質問した答えにまた質問するということが大変でした。でも、地元の文化を地元の人にインタビューすることは楽しかったです。最初は能登上布のことが全然わからなかったけど、「聞き書き」を通して知ることができてよかったです。

(宮下咲 写真:右)

相手の話を聞きながら反応や答え方を見て、相手が言いたいことを導きだす「聞き書き」は、最初は難しいと思っていました。また、学校の行事がたくさんある中、短い時間でどうやって分かりやすくまとめるか考えるのに苦戦し、思ったより時間がかかりました。でも、研修や実際のインタビューを通してよい聞き方やまとめ方がわかるようになって楽しかったです。

(田村優香 写真:左)

